ISSN 2186-7259

ZENBI

全国美術館会議機関誌

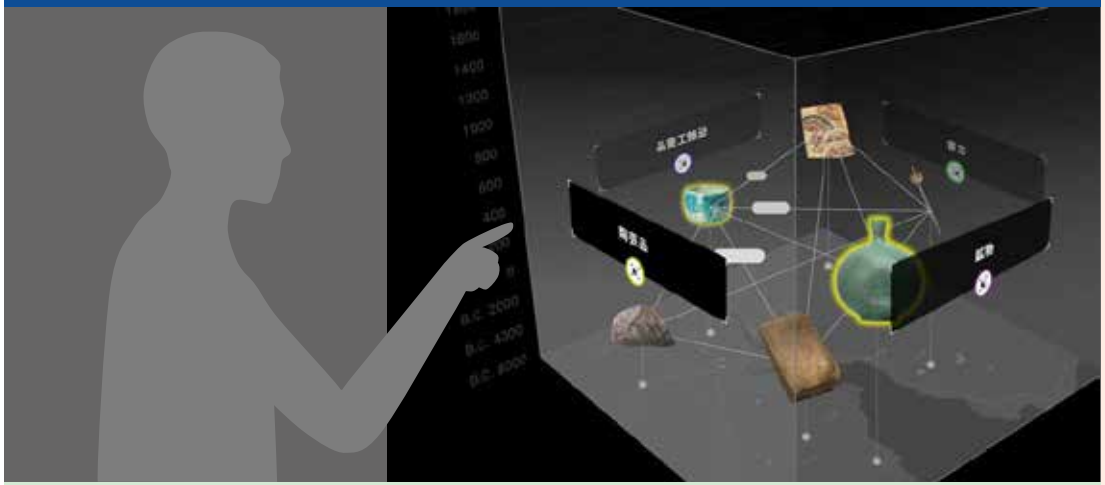
September 2022 [Vol.22]

DNP

DNPコンテンツインタラクティブシステム

「みどころキューブ® SaaS型」のご紹介

「みどころキューブ® SaaS型」は、ミュージアムの活動をサポートすべく、
デジタルアーカイブされたコレクションの魅力を手軽に、
効果的に伝えられるビューアとして開発されました。
収蔵する資料や作品同士の関係性を分かりやすく可視化し、
インタラクティブな操作で収蔵する資料や作品との"偶然の出会い"を創出します。



●鑑賞ツールやWEBコンテンツ、
教育普及活動など様々な使い方が可能

●サムネイル画像と解説さえあれば
オンライン公開が可能

●SaaS型により短期間・低価格での
導入利用が可能

本サービスの詳細については、
右記QRコードよりWebにてご覧ください。

大日本印刷株式会社

お問合せ先：マーケティング本部アーカイブ事業推進ユニット
〒162-8001 新宿区市谷加賀町1-1-1　mail: dnp_archive_query@team.dnp.co.jp

Contents

ブロック報告

2 ［北海道］ 続くコロナ禍での美術館活動　柳沢弥生
4 ［東　北］ 移動するひとびとに思う　根本亮子
6 ［関　東］ 美術館の周年記念展の意義　松下和美
8 ［東　京］ コロナ禍と博物館法改正の後で　大谷省吾
10 ［北信越］ ままならぬ日常をすごしていても　奥村真名美
12 ［東　海］ コロナ禍とコレクションの力　吉村有子
14 ［近　畿］ 周年、館長、開館、リニューアル、休館など　西田桐子
16 ［中　国］ コロナ禍2年目の山陰地方　南目美輝
18 ［四　国］ 美術館利用の想像力を支えるホームページに　竹内利夫
20 ［九　州］ ブロック報告　宮崎県を中心として　梅田一明

新規正会員紹介

22 原爆の図丸木美術館
23 横浜市民ギャラリー
24 横浜市民ギャラリーあざみ野
25 南砺市立福光美術館
26 真庭市蒜山ミュージアム
27 鳥取県立美術館（美術館整備局）

賛助会員各社　28
事務局から　30
「全国美術館会議：緊急時のための常備用資機材リスト」の作成と公開　32
投稿要領　34
ZENBI 全国美術館会議機関誌 投稿規定　35
編集後記　35

ISSN 2186-7259

ZENBI　全国美術館会議機関誌　Vol.22　2022年9月1日発行 ©（一社）全国美術館会議
［編集］（一社）全国美術館会議広報委員会
［発行者］（一社）全国美術館会議 〒102-0082 東京都千代田区一番町6-3-103 TEL 03-6272-8555
［デザイン］宮谷一款 ［印刷］日本写真印刷コミュニケーションズ株式会社 〒604-8551 京都市中京区壬生花井町3

続くコロナ禍での美術館活動

柳沢弥生（やなぎさわ やよい・前北海道立函館美術館）

2021年度の下半期を振り返るにあたり、引き続きコロナ禍にあることを言い訳に当館の活動の紹介が中心となることをお許しいただきたい。

前号と期間が重複して恐縮だが、2021年の上半期について思い返すと、北海道を対象とする国の緊急事態宣言発令を受けて道内の多くの美術館と並び当館も5月17日から6月20日まで臨時休館した。函館市の中心部で観光名所が集まる地域に位置する当館では、観光客の来館者が国内外を問わず多い。しかし再開後も、時節柄海外からはもちろん、国内の観光客の姿は少ない。市民も出控えている様子がうかがわれた。9月半ばから1月上旬まで、北海道内では新型コロナウィルスの新規感染者数が毎日二桁で推移するなど、感染拡大は落ちついていたにもかかわらず、こうした来館傾向は下半期も続くことになる。

当館では例年、近隣の幼稚園や市内の学校による団体観覧や、青森を始めとする東北地方や広く北海道内から来る宿泊研修や修学旅行の生徒たちの来館が多数あるが、それも激減。数少ない団体観覧の事前予約も直前に延期やキャンセルとなることがあった。時々刻々と変わる感染状況を睨みながら行事の実施の有無や行先変更などの検討を重ねている学校現場の様子は聞いていたが、それを美術館に居ながらにして感じることとなった。

そうしたなか「出張アート教室」が例年通り行われた。北海道教育委員会の主導で、北海道立の各美術館がそれぞれの管轄地域の学校に所蔵作品を持参し、学芸員が鑑賞授業を行う事業で、2012年度より実施している。昨年度、函館美術館は1校（せたな町立大成中学校、生徒数23名）に対して10月12日に実施。学校と美術館の担当者同士で、双方に感染症の不安要素が無いことを確認してから当日を迎えたのがいかにも今時らしい。同校と当館は車で2時間半近くの距離がある。生徒たちの長時間・長距離の移動や、都市部の人込みの中に入るかもしれないことを考えれば、少なくとも感染症をめぐる学校側の不安は相当に軽減されたことだろう。

出張アート教室当日、美専車で平面・立体計4点の作品を同校体育館に搬入・展示し、全3学年23名を対象に対面で一コマの鑑賞授業を行った。4、5人に分かれ1点ずつ鑑賞する。生徒たちは、おそるおそる作品に近づく。やがて生徒同士で「（描かれた）鬼の筋肉やばくね？」「（モティーフの獅子の）表情面白いからこっちから見てみ？」などと話したり、そばに立つ学芸員に「（軸作品を見て）こういうのうちにも掛かってます…！」と話しかけたり。そんな声を拾いながらの鑑賞授業となった。作品に接する、鑑賞する、仲間と意見交換する、美術館学芸員のような外部の人間と接する、といった様々な要素の詰まった50分間は幸い好評を得たようだ。担当教員は後日、当館で特別展の度に実施する「教員のための鑑賞研修」に参加、さらに鑑賞支援ツール「アートカード」を借りていき、独自に観賞授業を行った。出張アート教室が生徒だけでなく教員にとっても美術館活用のきっかけとなったならば、実施した意義もさらに深まる。

美術館に生徒・教員が直接来られるに越したことはないが、コロナ禍であることを差し引いても容易ではない。美術館や美術作品に接してもらう一つの方法として、こちらから出向くのは依然として有効だ。オンラインでできることが格段に増えている昨今、オフラインでライブ感覚を知ることがオンライン学習の深まりにつながることも期待できる。

さて、オンラインによる展開に関する北海道内の出来事として「北海道立美術館等所蔵作品データベース」（https://artmuseum.pref.hokkaido.lg.jp/database）の一般公開を紹介したい。2021年9月下旬から、道立の6つの美術館（北海道立近代美術館、北海道立三岸好太郎美術館、北海道立旭川美術館、北海道立函館美術館、北海道立帯広美術館、北海道立釧路芸術館）の所蔵作品のデータと作品画像をインターネットで誰もが検索・閲覧できるようになった。道立美術館では、「I.B.MUSEUM SaaS」において所蔵作品データベースを活用してきており、それを基盤にしたものである。

また、2022年3月下旬には「北海道デジタルミュージアム」（https://hokkaido-digital-museum.jp/）が公開となった。「博物館や美術館等の情報を多言語かつ包括的に発信する」ことを目的とし、「北海道内の博物館や美術館等の施設情報や、収蔵されている遺物、化石、絵画、彫刻など資料・作品を集約、デジタル化し、その魅力を発信する横断検索ポータルサイト」（同サイトより）である。北海道南部地域についていえば、現段階で北海道立函館美術館、市立函館博物館を含む22館が掲載され、各館の代表的な資料、作品が紹介されている。

なお、データベース、デジタルミュージアムともに公開に向けて学芸員らの地味な手作業が積み重ねられてきたことをここで付け加えたい。そして、今度は利用者がこうしたオンラインのサービスの活用可能性を広げてくれることが期待される。

「出張アート教室」の様子

東北ブロック

移動するひとびとに思う

根本 亮子（ねもと りょうこ・岩手県立美術館）

2021年度下半期の一般的な事柄をふりかえってみると、まず2021年10月から11月にかけては、新型コロナウイルス感染症が一時収束に向かい、国内移動の制限が解かれ、日常生活や美術館活動に少しずつ活気が戻ってきた時期だった。しかしそれもつかの間、年明けまもなくオミクロン株による第6波が急拡大し、全国各地でまん延防止等重点措置が適用。東北では青森・山形・福島各県に適用され（山形は2月20日、福島は3月6日、青森は3月21日まで）、これら3県の館はもとより、適用外の県でも、再び活動の休止や縮小を余儀なくされる例が見られた。

コロナと並び、あるいはそれ以上に各館の活動に影響を及ぼしたと思われるのは、3月16日深夜に福島県沖で発生したM7.4の地震である。全国美術館会議の災害時連絡網を通じて共有された情報や各館ウェブサイト上での報告によれば、レスキューを要する大きな作品被害は無かったものの、揺れの激しかった宮城と福島では、施設設備の点検修理のため、宮城県美術館が長期の臨時休館（6月25日から再開館）、福島県立美術館の常設展が3月22日まで休室、郡山市立美術館が3月17、18日に臨時休館となった。大多数の館は翌日から通常開館できたようだが、地震による東北新幹線の長期運休（全線再開は4月14日）は、業務上少なからぬ支障となったことだろう。筆者が勤務する岩手県立美術館での一例を挙げれば、4月10日に東京から講師を招いた講演会を予定していたが、3月末時点で運行再開時期の見込みが立たず、あいにく会期の短い展覧会だったため延期の判断も難しく、結局講師にはリモートで出演いただくこととなった。

さて、東北ブロックの主な出来事としては、前号でも紹介された11月3日の石巻市博物館開館、同日の八戸市美術館のリニューアル開館がまず挙げられよう。それぞれの開館記念展として、前者では「文化財レスキュー 救出された美術作品の現在（いま）」（2021年11月3日～2月27日）、後者では「ギフト、ギフト、」（2021年11月3日～2月20日）が開催された。同時期にはメモリアルな展覧会が他にもいくつかあり、岩手県立美術館と十和田市現代美術館では、周年事業としてそれぞれ「開館20周年記念　菅木志雄展　〈もの〉の存在と〈場〉の永遠」（2021年12月18日～2月20日）、Arts Towada 十周年記念「インター＋プレイ」展第2期（2021年10月1日～1月10日）を開催。青森県立美術館では、東日本大震災から10年の節目として「東日本大震災10年　あかしtestaments」展（2021年10月9日～1月23日）が開かれた。

本来ならこれらの詳細をレポートしたかったところだが、筆者個人の2021年度下半期は業務多忙で自館の展示しか見られておらず、残念ながらご報告できる内容がほとんどない。そこで代わりに、この時期の当館への来館者（主に学芸員や美術館関係者）に共通して見られたある動向について簡単に触れたい。12月18日に「菅木志雄展」が開幕してから年末までの、コロナ再流行直前のひととき、関東以西の地域から当館への来訪者が相次いだ。その際交わした雑談から興味深く思ったのは、何人もの人々が、弘前～青森～八戸～十和田～盛岡～仙台という、ほぼ同じ行程で各地の美術館を巡っていたことである。彼らが目的とした展覧会は、先に挙げたものと、昨年7月に開館した弘前れんが倉庫美術館の「りんご前線－Hirosaki Encounters」展（2021年10月1日～3月13日、1月20日から臨時休館）、せんだいメディアテークの20周年記念展「ナラティブの修復」（2021年11月3日～1月9日）であり、当館の菅展開幕によって、図らずも東北3県をまたぐ現代美術展鑑賞ルートが成立していたことをその時初めて知った。東北の雪景色と現代美術という組み合わせも、遠隔地からの来客には大きな魅力に映ったらしい。隣県の美術館は、主に集客の点でどちらかといえば競合相手であり、共同で展覧会を行うという発想はこれまで正直なかったが、今回の現象はゆるやかな連携の可能性を示唆するものとして、今後メモリアルイヤーの展覧会を企画する上で記憶に留めておきたいと思った。

最後に、東日本大震災で全国美術館会議がレスキュー活動に参加した陸前高田市立博物館の被災作品に関するご報告をしておきたい。応急処置後に長らく当館で展示していた柳原義達のブロンズ彫刻《岩頭の女（ひと）》が、3月下旬に無事里帰りを果たした。修復家の藤原徹氏により新しい台座が作られ、現在は新博物館の1階ホールに設置されている（博物館は今秋開館予定）。慣れ親しんだ作品との別れは寂しかったが、博物館担当者から「岩頭の女が帰ってきました」というメールとともに、展示画像が届いた時は心から嬉しく思った。被災作品の多くは今も当館で保管しているが、修復作業は今年度で完了する見込みであり、近い将来、これらの帰郷についてもご報告できる機会が訪れることを願っている。

新館に設置された《岩頭の女》（写真提供：陸前高田市立博物館）

関東ブロック

美術館の周年記念展の意義

松下和美（まつした かずみ・群馬県立館林美術館）

2021年度下半期、関東ブロックでは、私が勤務する群馬県立館林美術館を含め、周年記念展を開催した館が偶然ながらいくつかあったので、それらを中心に紹介する内容とさせていただきたい。

2021年10月に開館20年を迎えた当館では、昨年度5本の企画展のうち3本を周年記念として開催した。春に、開館準備室時代から関わる学芸員が20年の歩みを語る年表と共にコレクション形成の歴史をたどる展覧会を行った後、秋には「たてびレポート－開館20周年を楽しむ展覧会－」（2021年9月18日～11月7日）を開催した。本展では、近年の寄託作品や14年ぶりの購入作品となった山口晃の絵画を公開しコレクションの広がりを見せつつ、安部泰輔と星素子の2名の現代作家を迎え、地域や学校と関わるワークショップ、参加型作品のインスタレーションを行った。地域と連携した企画はこれまでにも行ってきたが、今回は館林市の全面的な協力を得て、2019年に日本遺産に登録された館林の「里沼（SATO-NUMA）」をテーマに取り入れたり、館林紬の素材提供を受けたりしながら、会期前から市民や美術館サポーターと共に活動を展開する大がかりなものとなった。この他、Twitterを活用し、「#私のたてびイチオシ写真」として当館の建築や周辺風景の写真を募集するなど、来館を促す試みも行った。

冬の「フランソワ・ポンポン展－動物を愛した彫刻家」（2021年11月23日～1月26日）は、20世紀フランスの動物彫刻家フランソワ・ポンポンの日本初の回顧展として全国5会場を巡回した企画展である。ポンポンのまとまったコレクションを有する当館は、フランスからの借用作品を加えた本展の企画構成を担った。当館は、作品の他に多数の関連資料を収蔵し、ポンポンのアトリエを再構成した別館では、その研究に基づく資料展示も続けてきた。20周年記念展としてそれらの成果を展示に組み込んで全館を会場とし、また友の会の協力を得てポンポンの研究書も刊行することができた。20年前にはほとんど関心を持たれなかったポンポンだが、その受容の変化に感慨を覚えるとともに、今後のコレクション活用について再考する機会となった。

さて、近隣の美術館に目を移すと、2021年7月に開館30年を迎えた高崎市美術館では、「5つの部屋＋I　多彩なコレクションで巡る高崎市美術館30年のあゆみ」展（1月15日～3月27日）として、コレクションを全室で紹介する展覧会が行われた。これまで折々に拝見してきた同館のコレクションだが、新鮮な感覚を得られたのは、各部屋をまとめる視点が高崎や群馬ゆかりの作家といったベーシックなカテゴリーに限られないところにあったからだろう。鶴岡政男や山口薫から、高崎の文化活動の支援者として功績を残した実業家、井上房一郎へ、さらにグラフィック・デザイナーの佐藤晃一までたどった「絆の部屋」などは、各作家の企画展を丁寧に開催してきた同館の蓄積によるものである。「前衛と革命の部屋」では1960年代の群馬NOMOグループの作品、さらに近年の収蔵作品も展示されており、随所で発見のある展覧会だった。

今年開館40周年となる埼玉県立近代美術館では、「扉は開いているか－美術館とコレクション1982-2022」展（2月5日～5月15日）と題し、コレクションの成長を回顧する充実した展覧会が開催された。コレクションの原点にあった近代の作品群に始まり、黒川紀章による美術館建築、瑛九や小村雪岱の豊富なコレクション、もの派など1970年代の美術動向を検証した過去の重要な企画展、川俣正や田中米吉など建築と関わるコミッション・ワークやプロジェクトまで、多数の資料も活用して、同館の幅広く多層的な活動が紹介された。その中で、美術館建築や、近年、同館が所在する北浦和公園内に設置された黒川紀章設計《中銀カプセルタワービル》のモデルを写真作家や映像作家が撮った新しいイメージによって紹介するコーナーは、フレッシュな感覚を取り入れ、過去を現代につなげて見せる同館の姿勢を伝えていた。本展のカタログは、同館と日本の近代美術館を巡る論考を始め、40年の詳細な活動年譜、重要なアーカイブズの再録、時代を経てこそ語ることができる作品の歴史を綴ったコラム、さらに同館建築図面のポスター2枚まで付録された、周年記念展の理想的なカタログであったことも特記したい。

コレクションや活動の歴史を振り返る周年記念展は、多くの来館者を集めるのは難しいかもしれないが、美術館の成長を来館者と共に再確認し次なる活動につなげる機会として意義深いものと言える。

最後にコレクションを活かした他の二つの展覧会に触れておきたい。群馬県桐生市の大川美術館では「松本竣介《街》と昭和モダン―糖業協会と大川美術館のコレクションによる」展（2021年10月16日～12月12日）として、同館と公益社団法人糖業協会の近代洋画コレクションを合わせた企画展が開催された。地道な研究を重ねる学芸員の手腕の光る展覧会であった。年度始めから企画展活動を休止していたアーツ前橋では、「生の軌跡－Trace of Life－」展（2021年11月13日～3月6日）として、過去の企画展を通して着実に形成されてきたコレクションをベースに地域の作家やコレクターとのつながりを活かした展覧会が行われた。

群馬県立館林美術館「たてびレポート－開館20周年を楽しむ展覧会－」展　会場風景
（撮影：久保貴史）

コロナ禍と博物館法改正の後で

大谷省吾（おおたに しょうご・東京国立近代美術館）

最近、ある新聞社から取材を受ける機会があった。今年はアーティゾン美術館と、筆者の勤務する東京国立近代美術館が創立 70 周年、そして東京国立博物館が創立 150 周年という節目の年だが、一方で新型コロナウイルスの問題は続き、また 4 月には博物館法の改正案が国会で可決されるなど、美術館・博物館にとって変化の時期でもある。それらにどのように対応しようとしているのか、ということを尋ねられたのである。

コロナ禍に関する話題にはもう誰もがウンザリしていることと思う。昨秋いったん落ち着いたかにみえた状況は、年が明けてからの第 6 波襲来でまた悪化に転じ、1 月 21 日から 3 月 21 日まで東京都は「まん延防止等重点措置」を適用した。今回は、以前の緊急事態宣言時のように閉館措置をした館はほとんどなかったにせよ（東京都現代美術館のコレクション展など、閉めたところもある）、しかし開館はしていても、会場内の密を避けるための事前予約制や入場制限などによって、入場料収入を減じた館は少なくない。そして入場制限をするまでもなく、やはり客足は鈍っていると言わざるをえない。若年層はそれなりに動いているのかもしれないが、筆者の勤務する東京国立近代美術館はもともとシニア層の観客が多いので（中高年のご婦人方は、以前は連れだって来館されたが、この状況ではなかなかそうもいかない）、この春に開催した「没後 50 年　鏑木清方展」は苦戦を強いられた。

新型コロナウイルスによってもう一つ制限せざるをえないのが、対面でのイベントである。とはいえ、いつまでも手をこまねいてはいられない。東京都現代美術館では、「ガイドスタッフが装着したマイクの音声をイヤホンのついた受信機を介して」聞く方式で、人数を絞りつつギャラリーツアーを再開したといい、こうした工夫は様々に試みられるべきであろう。ただしこの方式ではガイドから観客への一方通行の解説しかできない。対話形式での鑑賞だと、どうしても感染リスクが課題となる。長年、対話鑑賞に取り組んできた東京国立近代美術館は、しばらく対面での実施を見合わせてきているが、2020 年の秋からオンラインでの対話鑑賞を導入している。対面に比べると、作品のサイズ感や質感などを捉えにくいという制約もある一方で、遠方の方でも参加できるというメリットもあり、今後その可能性は広がっていくかもしれない。

またイベントのオンライン展開とは別に、オンラインコンテンツの充実にも多くの館が取り組んできている。とはいえ、手間暇かけて作ったコンテンツをどれだけの数の人々に視聴していただけているかというと心もとない。昨年度、東京国立近代美術館ではインターン生に、国内外の約 500 館の美術館のホームページ調査をしてもらったのだが、その調査結果に基づく考察で、せっかくのコンテンツが、国内美術館の多くではサイト内の階層の深いところにあって辿り着きにくく、一方、海外のメジャーな美術館では、浅い階層に作品ヴィジュアルとともに入口がわかりやすく示されていて興味をひく、との指摘があった。コンテンツを作るだけでなく、多くの方々に見ていただくための工夫もまた必要である。

さてもう一つ博物館法改正だが、これについては全国美術館会議からも要望書を文部科学大臣に提出するなど、現状の疲弊した美術館・博物館に少しでもプラス要因がもたらされることが期待されていたはずだが、改正が今後、美術館・博物館の現場にどのような影響を及ぼしていくか、現段階ではまだ展望を語りにくい。改正後の報道では、美術館・博物館が社会教育施設から文化観光施設への転換を求められることに伴う懸念が語られもしたし、本稿冒頭で触れた新聞社の取材でも、改正によって来館者数の増加や収益の増加が期待されることに、どのように対応していくのか、と問われた。私はそれに対して「文化観光施設としての役割が求められる趨勢にあることは事実にせよ、それは決して転換ではなくて、美術館本来の仕事としての美術作品の研究の充実があってこそ、質の高い展示やイベントが提供できるはず」と答えたのだが、東京国立近代美術館でこの冬開催した「民藝の 100 年」展（2021 年 10 月 26 日〜 2 月 13 日）も、幅広い興味関心の入口を設けつつ、企画者（花井久穂、鈴木勝雄）による綿密な調査によって、従来とは異なる民藝像を提示する様々な奥行きをもった展示にできたと思う。美術史的な掘り下げを、いかに今日の多くの方々の日常的な興味に接続するかという努力はこれからますます必要になるだろうし、その意味では最近の都内の展覧会では、東京都庭園美術館の「奇想のモード　装うことへの狂気、またはシュルレアリスム」展（1 月 15 日〜 4 月 10 日）を興味深く拝見した。また世田谷美術館の「ART/MUSIC　わたしたちの創作は音楽とともにある」展（2021 年 12 月 4 日〜 4 月 10 日）のように、コレクションをどのように魅力的に見せていくかがますます問われるようになるだろう。

東京国立近代美術館「柳宗悦没後 60 年記念展　民藝の 100 年」会場風景（撮影：木奥惠三）

ままならぬ日常をすごしていても

奥村真名美（おくむら まなみ・新潟市新津美術館）

北信越ブロックの報告という趣旨を理解しつつも、新型コロナウイルス感染症の拡大状況に伴う移動制限等により県外施設に足を運ぶことが出来なかった。そのため本稿の話題が新潟県内中心になること心苦しい限りであるが、ご容赦いただきたい。

2021年度下半期を振り返るにあたって、夏の全国的な感染者の拡大の影響を抜きにして容易には語り得ず、9月の様子から触れていきたい。

筆者が所属する新潟市新津美術館（以下、新津美術館）は、新潟県からの要請に従い感染拡大防止のため約2週間臨時休館した。この間に予定していたイベントも中止し、休館期間が明けた2021年9月17日から11月7日まで「富野由悠季の世界」展を開催（当初予定は、9月4日～11月7日）。アニメーション監督・演出家の富野由悠季の仕事の全貌を紹介した。新潟県立近代美術館では「高畑勲展―日本のアニメーションに遺したもの」（9月18日～11月14日）、新潟県立万代島美術館では「コレクター福富太郎の眼　昭和のキャバレー王が愛した絵画」展（9月18日～11月7日）が開催され、芸術の秋を彩った。新津美術館と新潟県立近代美術館の展示が「アニメーション監督」という繋がりがあったことで、両館の展覧会チケット提示でオリジナルステッカーを進呈する連携キャンペーンを実施。相互の展覧会を盛り上げる仕掛けとして来場者に好評を博した。

11月頃から新潟で少しずつ冬の気配を感じるようになる。曇り空が増え秋も深まった11月27日、新潟市美術館で「香月泰男展　生誕110年」（2021年11月27日～1月23日）が開幕した。香月泰男が「台所の作家」と称されたことにちなみ、『おうちの台所（とその近く）で見つけた品々やできごと』を描いた絵画を募集し、会期中に関連企画として公募展「台所の絵画展」を実施。子どもから大人まで、様々な「台所の絵画」が集まり、人気投票も行われた。年が明け、冬の寒さが最も厳しい時季となる1月23日、同展は閉幕した。

新潟県立万代島美術館では「サンリオ展―ニッポンのカワイイ文化60年史」（1月20日～4月10日）が開催され、時代を超えて愛され続ける「サンリオの想い」を紹介した。新津美術館では、自主企画展「秋葉区ゆかりの作家たち」（1月22日～3月6日）を開催し、新津美術館が位置する秋葉区に関わりのある作家たちの作品をひろく紹介した。新津美術館と新潟市美術館の所蔵品を活用し、日本画、洋画、版画、写真などから地域にゆかりある作家たちを振り返る格好の機会となった。新潟市美術館も同様に両館の所蔵品による自主企画展「LOVE & LIFE　コレクションより愛をこめて」（2月26日～3月27日）を全館展示で開催。長引くコロナ禍の影響で、価値観や意見のすれ違いなどが顕在化する「今」だからこそ思い起こしてほしい「愛のかたち」「命のかたち」を、多様な作家の表現を通してひろく紹介した。いくぶん日差しの明るさが感じられるようになった3月6日に講演会「画家・木下晋　作品の世界を語る」を行い、多くの来場者が講師の言葉に耳を傾けた。

雪国である新潟の冬は厳しく、降雪や悪天候による交通機関の乱れに気を配ることになる。人の動きが鈍りやすいこの時季、ましてやコロナ禍である。各館は工夫を凝らしながら美術館活動を行い、地中に根を張るかのように暖かな春の到来を静かに待っている。

寒さも緩み出かけやすい気候になる頃、各館春の展示が花開き始めた。春の展示の先駆けになったのが、新津美術館の「MINIATURE LIFE 展2　田中達也見立ての世界」（3月19日～5月15日）である。日常にある物とジオラマ用の人形を組み合わせた制作を手掛ける「見立て作家」である写真家の田中達也の作品を紹介している。次いで新潟市美術館で「宮城県美術館所蔵 絵本原画の世界展2022　こどものとも―『ぐりとぐら』も生まれた場所」（4月9日～5月22日）が開幕し、宮城県美術館が所蔵する絵本原画コレクションの中から初期作はじめ馴染み深い人気作を紹介。新潟県立近代美術館では「平等院鳳凰堂と浄土院　その美と信仰」展（4月23日～6月5日）、新潟県立万代島美術館では「ボストン美術館所蔵　THE HEROES　刀剣×浮世絵―武者たちの物語」展（4月23日～6月19日）が開幕した。また、4月29日から11月13日までの会期で「越後妻有　大地の芸術祭2022」が開催される（2021年度開催の予定であったが、感染拡大に配慮し延期しての開催になった）。

さて本稿執筆時、当館の「MINIATURE LIFE 展2」開催真っただ中であるが、非常に多くの来場者に恵まれ「嬉しい悲鳴」を上げている。開幕直後から1週間で1万人の来場者を平均的にキープしており、コロナ禍以前の最高観覧者数（2015年「魔法の美術館」展の74,498人）を超えるのではないかと期待される。まさに全年齢層のお客様の来場があり、土日祝日には適宜入場制限を行い、職員一同で対応にあたっている。アンケートでも好意的な感想が多く、「ユーモアを大切にしたい」「笑った（笑顔になった）」「和んだ」「癒された」といったコメントが並ぶ。田中達也のユーモア溢れる作品世界が、笑顔の花を咲かせるひとときをもたらしているようである。コロナ禍でままならぬ日常を過ごしていても、展示を楽しむお客様の様子が見られることを嬉しく思う。

新潟市新津美術館「MINIATURE LIFE 展2」会場風景

コロナ禍とコレクションの力

吉村有子（よしむら ゆうこ・ヤマザキマザック美術館）

2019年末に端を発した新型コロナウイルス禍。美術館の世界においても、新型コロナウイルスの影響について触れずに展覧会やそれに付随する関連事業について語ることが難しいほどである。工作機械メーカー、ヤマザキマザック株式会社の元会長山崎照幸が収集したフランス美術コレクションを展示する美術館である当館は、春〜夏と、秋〜冬の年に2回、単独自主の小規模な企画展を開催しているだけだが、その当館でさえその影響を免れ得なかった。2019年11月15日から開催していた「フランスに生きた日本人画家　木村忠太の世界　色と線の美しい記憶」展は、会期を1週間残して2020年3月1日で閉幕。2020年4月25日〜8月30日に開催を予定していた「親密派の光と影　ボナールが生きた時代」展は、事態を重く受け止めた本社の意向もあり、全面的に中止という重い決断が下された。当館での展覧会中止は、新型コロナウイルス感染拡大状況下におけるかなり早い段階での決断だったが、その後は他館でも企画展の延期や中止が相次ぐこととなった。

巨額の予算をかけ、海外の美術館から作品を借用した大型美術展が中止・休止・延期を余儀なくされ、従来であれば次から次へと開催されていた花形の海外展が極めて少ないという異例の事態は多くの美術ファンを落胆させていたが、そのような中で国内の美術館が持つまとまったコレクションを活用した展覧会が通常よりも注目を集めたように感じられた。もちろん、コロナ禍だからといって急遽企画されたという場合は少なく、新型コロナウイルスの流行が始まる以前から水面下で計画されていた展覧会がほとんどだったとは思うが、通常であれば華やかな大型企画展の影に隠れがちになってしまう展覧会が通常よりも積極的にアピールされることになった、もしくは、コロナ禍でも展覧会鑑賞を求める美術ファンの目にとまりやすくなり、足を運んでもらう確率が高くなったのは、不謹慎な表現かもしれないが、コロナ禍がもたらした幸いな一面だった。そのような事例として目にとまった二つの展覧会をご紹介したい。コロナ禍で、県外への外出が憚られる時期もあったため、実見できない展覧会も多く、取り上げる展覧会が極めて限られてしまっていることをお許し頂きたい。

「杉浦非水　時代をひらくデザイン」展は、2021年7月3日に島根県立石見美術館から始まって、たばこと塩の博物館、三重県立美術館と巡回し、6月12日まで福岡県立美術館で開催された巡回展であり、日本の商業デザイナーの草分けであり、「日本のアール・ヌーヴォー」と称されることもある杉浦非水の画業と足跡を約300件の作品と資料で総括するものである。非水の出身地である愛媛県松山市の愛媛県美術館が収蔵する約7,000件にもおよぶ膨大な非水コレクションとこれまでの研究成果を大きな土台とし、愛媛県美術館のコレクションを核としつつ、巡回会場となった各館や東京国立近代美術館、株式会社三越伊勢丹、東京藝術大学、神戸ファッション美術館などの所蔵作品も多く出品されていた。日本画、三越のための各種図案、広告デザイン、書籍の装丁、植物図譜など実に多面的な杉浦非水の創作の全貌が詳らかにされ、まさにコレクションの底力を感じさせる展覧会だった。私が拝見したのは三重県立美術館（2021年11月23日〜1月30日）においてだったが、新型コロナウイルスが感染拡大中の時期だったにもかかわらず、そして「杉浦非水」という名前が一般の人々に広く知れ渡っているとは言いがたいにもかかわらず、展示室内は少人数で連れだって訪れた美術ファンたちで静かな活気があった。

そして、市町村立美術館活性化事業として企画された「池袋モンパルナス－画家たちの交差点－」展は、2021年8月7日に筑西市のしもだて美術館から始まって瀬戸市美術館、酒田市美術館と巡回した展覧会である。1920年代から小熊秀雄、寺田政明、麻生三郎、吉井忠ら数多くの画家たちが集った池袋周辺のコロニー「池袋モンパルナス」の全容を、板橋区立美術館と豊島区の所蔵作品を中心に紹介した意味深い展覧会だった。それぞれの開催館は核となる巡回作品86点に付け加えて、森田茂（筑西市）、北川民次（瀬戸市）、斎藤長三、今井繁三郎（酒田市）と、それぞれの立地市出身・ゆかりの画家の作品を展示し、「池袋モンパルナス」とからめて地元作家の画業を改めて振り返る機会を作っていたことも意義ある点だった。私が拝見したのは瀬戸市美術館（2021年10月2日〜11月14日）においてだったが、馴染みのある「北川民次」の作品をクッションとして（見慣れない）他の画家たちの作品にも見入っている地元の人々の姿が印象的だった。また、近隣の瀬戸信用金庫アートギャラリーの「常設展示　瀬戸信用金庫所蔵　北川民次展」、企画展「北川民次にゆかりのある作家達－Part1－」（2021年10月9日〜11月14日）とも連携し、作家との縁が深い土地ならではの方法で展覧会の充実度を深めていた。

コロナ禍の中で海外展を見る機会が減じられたのは残念だったが、このように充実した国内作家コレクションの魅力を再発見する機会や楽しみが広がりを見せたのは嬉しいことだった。コロナ禍が収束し、そしてさらにはウクライナにおける戦争が収束すれば、大規模な海外展も華やかに復活することになるだろうが、国内作家コレクションを核とした展覧会への興味や注目も定着し、高まっていくことを願わずにいられない。

三重県立美術館「杉浦非水　時代をひらくデザイン」展　会場風景

瀬戸市美術館「池袋モンパルナス－画家たちの交差点－」展　会場風景

近畿ブロック

周年、館長、開館、リニューアル、休館など

西田桐子（にしだ きりこ・兵庫県立美術館）

感染症の流行があろうが、自然災害があろうが、戦争があろうが、物価高であろうが、施設の開館の記念周年はやってくる。「今この時期に？」との思いも湧いてくる昨今なので、干支を使うとか、ゾロ目みたいな数字を使って縁起をかつぐとか、もっと自由な周年ではダメですか、などと考えてみるが、まあダメでしょうね。

ということで、本小文を近畿ブロック会員館の周年展からはじめたい。和歌山県立近代美術館の県政150年記念展「和歌山の近現代美術の精華」（2021年10月23日〜12月19日）が、一昨年の開館50周年関連展より強烈に「和歌山」を感じさせた。全館使用の2部構成。2冊合本の大部な図録に圧倒され、毎度ながらの端正で見やすい展示にも感心するが、何より展覧会名の「近現代」の「近」がまぶしい。そう、「近代」を名乗る県立美術館は近畿ブロックでは、昨年の滋賀県立美術館リニューアルオープンをもって、ついに和歌山1館になった。この「近代」にこだわる現館長が同館サイトで「わが国の近代美術館事情」を1〜2ヶ月に1度連載中だ。

サイトでの館長メッセージというと、昨年4月に就任した籔内佐斗司奈良県立美術館館長がすごい勢いで更新を続けている。題して「籔内佐斗司館長の部屋」。館長の部屋だけかと思いきや、なんと「学芸員の部屋」もあって、こちらでは主に副館長・学芸課長の文章が館長に劣らぬ頻度でアップされている。館長、副館長の2人がここまで、自館サイトに書きに書いている美術館は珍しいのではないか。しかも、微妙に（いや、かなり）館の活動から離れた話題もあり、しかしこれがかえって、美術館の背後にあるべき「文化」の2文字を思い出させてくれる。

話を周年に戻すと、1996年開館の田辺市立美術館が開館25周年を迎え、昨年度1年かけて記念のコレクション展と特別展計5本を開催した。もう1本の特別展と分館熊野古道なかへち美術館の展覧会。それらを学芸員3名でこなす日々！やはり、これは大変だ。ほかに、1991年開館の芦屋市立美術博物館が「開館30周年記念 特別展 限らない世界／村上三郎」（2021年12月4日〜2月6日）を開催。奈良県立万葉文化館が昨年9月に開館20周年を迎え、館蔵品展「万葉コレクション展〜万葉文化館20年の歩み〜」（2021年12月4日〜3月13日）を開催した。ところで、本年度の同館には、もうひとつ別の「節目の年」に関連する事業がある。672年の「壬申の乱」から数えて今年で1350年なのだ。「奈良ならでは」ということだろうが（奈良県が2012年にはじめた「なら記紀万葉プロジェクト」の一環である）、1350年というのが新鮮。

避けて通れない周年とは別に、冒頭に書いた社会的な事象の中での開館には、また別なる思いがこみあげる。締め切り間際にこれを書いているつい数日前、2020年春にリニューアルオープンを迎えた京都市京セラ美術館こと京都市美術館の某学芸員氏の「京都もやっと人が戻ってきたような感じ」という言葉を電話口で聞いた。春でなくて、何であろうか。

さて、開館といえば、ブロックきってのビッグニュースは、本年2月の大阪中之島美術館開館であろう。何しろ長い準備期間だった。その間、収集は言うに及ばず、展覧会、調査・研究など美術館の活動はほとんどされていたので、すでにどこかに建物が出来ているのではないかと錯覚したこともあった。もちろん、全国美術館会議正会員としても長い。筆者は柿落しの「大阪市中之島美術館開館記念 Hello! Super Collection 超コレクション展—99のものがたり」（2月2日〜3月21日）終盤の平日に訪れたが、予約枠は埋まり、会場もかなりの混雑で年配客も多い印象だ。大阪府ほか近隣府県にいわゆる「まん防」が発令中で、大阪府の感染症者数もかなりのものだった時期にもかかわらず、だ。いろいろ言う向きもあるだろう。来館者は、ひと手間かかる予約制、要所要所の行列、声を発しているが伝わりにくい案内の声の数々を、ひとまず我慢し是認しているようにみえる。客とはありがたいものだという思いと安堵感が押し寄せた。今、ここで閑古鳥が鳴いてもらっては、近隣美術館を含む未来が余りに暗すぎる。

このほか、つい先日の4月22日、市立伊丹ミュージアムが伊丹市立美術館等のあった土地でグランドオープンを迎えた。美術、俳句、酒、工芸・クラフトの内容に博物館の機能も合体されて、いっそうのてんこもり感というか、伊丹市の「必然」を語る緊密度が増した。入江泰吉記念奈良市写真美術館も施設工事のため半年近く休館し、新館長を迎え本年4月より再開。改修工事のため昨年8月30日から休館していた神戸市立博物館も、2月5日に特別展「大英博物館ミイラ展　古代エジプト6つの物語」（〜5月8日）開幕と同時に再開した。

リニューアル後オープンする館もあれば、休館に突入する館もある。大阪市立東洋陶磁美術館が2月7日から来年秋まで休館。大阪市立美術館も大規模改修工事のため秋から長期休館に入る予定とのことだ（両館とも公募によって決定した新館長を4月に迎えた）。

京都国立博物館本館（明治古都館）の休館も長い。『京都国立博物館だより』4・5・6月号の「よみもの」欄で同館館長が、本館の建物も文化財であり、これを末永く維持していくための慎重な耐震工事が必要で、まだまだ長い工程が予想されるのだ、と率直かつ言って論すように書いている。そうですか、それであれば、待ちますとも！しかし、新しくなってからのでも、その前のものでもいいが、京博の「平常展」は懐かしい。コレクション展、名品展などと称してもいいが、収蔵品を「平常」ですよと言って展示する、その「平常」の意味と響きは、今、結構重いのではないか。

「大阪中之島美術館　開館記念 Hello! Super Collection 超コレクション展—99のものがたり—」内覧会テープカット

コロナ禍2年目の山陰地方

南目美輝（なんもく みき・島根県立石見美術館）

筆者が住む島根県では、コロナ禍となってから、鳥取県を除く県外との不要不急の往来を控えることに加え、会食について時間や人数の制限、さらには県外の人との会食不可など、感染防止のための県民への「お願い」が他県と比べると厳しめとなっていることもあり、県外に出かけづらい状況が続いている。年明け早々には、広島県、山口県がまん延防止等重点措置の該当地域に指定されると、島根県でも間をおかず感染者数が増加し、初めて同措置が適用される事態となった。2021年度下半期は、移動の自粛が特に強く求められる時期となり、鳥取を除き県境を越える移動を控えざるを得なかった。限られた地域の報告となり恐縮だが、ここでは山陰両県の美術館の動向とともに、コロナ禍での美術館活動が2年以上経過した現時点で感じたことを記したい。

島根県立美術館は、2021年5月から約1年間、改修工事のために休館している。この間、エントランスロビーの天井の耐震化工事に加え、開館以来稼働し続けていた空調や照明設備、建築、外構などが更新された。さらに、「水を画題とする絵画」を展示する「水辺の展示室」や、質量ともに充実した北斎コレクションを紹介する「北斎展示室」が新設され、特色ある収蔵品が常時観られるようになる。キッズライブラリーへのあらたな映像作品の導入や、子ども同伴での鑑賞を優先する「かぞくの時間」の拡充など、幅広い層にとって来館しやすくなるような工夫もなされた。今年6月に再オープンしている。

勤務先の島根県立石見美術館では、併設されている県立劇場で、昨年11月から吊り天井の耐震化工事が始まった。劇場の改修は美術館運営に直接の影響はないものの、ホールが使用できないため施設全体での利用者数は減っている。そして長期化するコロナ禍である。島根県の西端に位置し、美術館来場者のおよそ半分が県外（山口と広島）からという同館では、この2年間、感染状況によっては県外への広報を控えるという対応を続けており、集客面での厳しさが際立つ。実際、2021年秋に開催した「河井寛次郎と島根の民藝」展（2021年9月11日〜11月1日）の来場者数は目標の6割強、冬に開催した「美男におわす」展（2021年11月27日〜1月24日）は、会期終盤にいわゆる「第6波」の影響を受け4割弱にとどまった。「河井寛次郎と島根の民藝」展では、長期休館中の島根県立美術館の河井寛次郎コレクションとあわせ、島根県の出雲と石見、両地方の民藝に関する動向を紹介した。同展会期中に、東京国立近代美術館で「柳宗悦没後60年記念展　民藝の100年」（2021年10月26日〜2月13日）が開催され、あらためて「民藝」が注目された時期ではあった。しかし9月末に緊急事態宣言が解除された後も、人の動きは鈍いままだった。他方、埼玉県立近代美術館との共催で準備を進めていた「美男におわす」展は、コロナ禍で延期となり、昨年秋に開幕の運びとなった。美術史の分野でこれまであまり語られてこなかった「美しい」男性のイメージを追い、それらに人々がなにを求めてきたのかを探る内容である。江戸から現代までの多彩な男性像を見ていくと、時代とともに理想的な男性イメージが作り手、受け手の双方で変化していくことがわかる。加えて、同展が提示する男性像を見るための「拝む」「愛でる」「楽しむ」「憧れる」といった視点が、私たちが日常で行なっている「美男」を見て、語る際にも有効であることに気づかされる。「美男画」というユニークなコンセプトを打ち出した同展だが、前述のとおり島根会場に足を運ぶ人の数は限られていた。同館のような人口集積地から離れた施設では、コロナが終息した後も、オンライン・コンテンツも充実させ、受け手との接点を多様化していくことが有効であるように思われた。

最後に、2021年度下半期の出来事として、ロシアによるウクライナ侵攻に触れないわけにはいかないだろう。侵攻が始まって以降、連日ウクライナの痛ましい状況とともにロシアをはじめとする各国の動勢が様々に報じられている。この侵略戦争が始まり3週間ほどたったタイミングで、筆者は鳥取県立博物館で、鳥取ゆかりの画家、小早川秋聲の回顧展「小早川秋聲　旅する画家の鎮魂歌」（2月11日〜3月21日）を観る機会を得た。同展では、戦死した将校を描いた代表作《國之楯》の他にもいくつか戦争画が紹介されており、そうした作品にどうしても目が向いてしまう。兵士の戦死や一般市民の死、銃後の家族といった主題は、現在進行中の戦争と切り離して見ることができない。そしてまた、小早川の作品をとおして、従軍画家と戦争プロパガンダ、加害の国の側の「表現」のあり方など、今向き合うべき切実な問題について考えざるを得ないのである。戦争や感染症の流行、自然災害といった災厄とそれに伴う社会状況の変化が、私たちの生活や意識にあたえる影響は無視できないほど大きく、そのこと以前と以後とで、受け手の文脈もがらりと変わってしまうことを痛感している。

島根県立美術館　新設された「水辺の展示室」

島根県立石見美術館「美男におわす」展　会場風景
左　金巻芳俊《空刻メメント・モリ》2021年、
中央　木村了子《男子楽園図屏風–EAST & WEST》2011年、
右　木村了子《月下美人図》2020年

四国ブロック

美術館利用の想像力を支えるホームページに

竹内利夫（たけうち としお・徳島県立近代美術館）

この2年間で急速に普及していったオンラインの会合や教育プログラムを体験する中で思い知ったことがある。そうした擬似的な現実を前に、自分なりのリアル感が満たされることの大切さと、それが叶い身近に感じられるか否かを左右するICTの手順は、使いこなせる人を選ぶということだ。もっともそれは、以前から普及していたホームページやSNSによる発信にも通じることだろう。筆者は今、ホームページの改善に取り組んでいる。自館での経験をふりかえりつつ、来館する人のための情報という視点から話題提供したい。

本館では2021年12月に、来館する前に見るためのホームページ「イテミヨ」を公開した。来館前というのは、例えば優先トイレの間取りや休憩スペース、駐車場から玄関までの道のりなどを、館での過ごし方をイメージできるように映像等で確認してもらおうという趣旨である。館の立地や建物をおおまかに見る「スライドツアー」、実際に順路を歩いて撮影した「ビデオめぐり」、設備の様子を映像で確認できる「フロアマップ」、過ごし方のマナーを例示した「よくある質問」を作成した。

これらを作ったきっかけは、発達障がいのある人が安心して施設を利用するためのガイドブックや、音や光の刺激が多い場所を示す館内マップなどセンサリーフレンドリーの取り組みを知ったことである。自館でガイドとして提供するには、実際に使う人や関係者との協働が必要であり、これからの課題だが、まず手始めに、外出に不安を抱える人に向けた情報を少しでも増やそうと考えた。発端は約1年前にさかのぼる。2020年10月からの半年間、エイブル・アート・ジャパンの企画「アクセスアート・オンライン試行事業」に参加した。これはコロナ禍にあって障がいのある人が情報弱者としてオンラインプログラムなどの対策からこぼれ落ちていく事態へのアクションとして企画されたものだ。勉強会を通して先行事例を知るとともに、感覚過敏の研究者や発達障がいの当事者の方と意見交換する機会を得て、その中で「イテミヨ」のアイデアを検討した[1]。

ここで提案している内容自体は、目新しいものではない。ただ、文字で書けばわかる、見ればわかる、などと思い込んでいた「あたり前」や暗黙知を見直す作業は、それなりに長く勤めてきた学芸員にとっては新鮮で刺激的な学びの時間であった。本年3月には、「イテミヨ」の発想を広げて利用案内ページをリニューアルし、よくある質問やバリアフリー情報を充実させ多言語で提供できるようにした。ささやかだが、誰にもやさしいアクセス改善を目指して模索を続けている。

ところで施設や交通のアクセシビリティは、ある1ヶ所がデザインされたら役目を果たせるものではない。そこへ着くまでの道のり、街全体が面としてカバーされていくことが理想である。そんな興味から、試みに近隣のブロック加盟館のホームページを、アクセス情報の視点で一巡り観察してみた。美術館業界で点がつながり面となっていく様子を思いながら。

さて、各館ホームページの「表現」を見て改めて実感できたのは、様々な立地や来館者動向に応じて見せ方も力点も違うということだ。駅に近いのか、単館か否か、団体や宿泊についてはどうか。そうした館の置かれる事情に応じて最適な情報発信が成されているのは当然のことだ。だから筆者はここで、横並びに情報化のノウハウがそろってしかるべきと考えているのではないことをお断りした上で、気づいたことをいくつか紹介してみたい。

障がい者対応の情報を掲載する館は、四国ブロック16館の内50%。3年前の調査では全国平均15%という数値がある[2]。やはりオリンピック・パラリンピック開催を機にバリアフリー情報の見える化が進んだと想像する。外国語対応は69%で、先述の調査結果26%から大幅に増えた。これには所管する自治体全体で翻訳サービスが進んだ例も含まれる。そして、館の立地や設備の様子をイメージしやすくする工夫として、映像や写真などを活用する例は44%あった。このように基本的なアクセス情報に多様な角度からたどりつけるよう工夫してみることが改善の近道だと思う。

いわば自分が旅行者になった気持ちで各館のホームページを見比べてみた時、愛媛県美術館の情報充実の徹底ぶりには目を見張るものがあった。館内での運営に関わっている担当者に聞くと、やはり利用者からの声や、現場スタッフのニーズなどをつぶさに吸い上げ、修正と改善につとめているそうだ。「視聴覚障がい者の方へ」という映像メニューが、誰にとっても使いやすく機能している点にも感心した。鑑賞活動の充実を中心課題とする「みることを考える」プロジェクトに連動して制作された経緯があったそうだが、本稿の興味から見ればユニバーサルデザインの望ましい展開例と思われ、大いにまねしてみたい。

以上、活動レポートというには雑ぱくな内容になったことをお許し願いたい。来館者の興味の中心が作品鑑賞であることは間違いないとしても、日常から離れ、移動し、思い思いの期待を胸に観覧の時を過ごすという一連の活動を、身近なものとして想像してもらうために、アクセス情報が果たす役割は決して少なくない、そういうことを呼びかけてみたいと考えた。

1 研究会の経緯は下記URLに報告されている。
http://www.ableart.org/topic/project/202102_accessart_report.html
2『令和元年度日本の博物館総合調査報告書』2020年、日本博物館協会

「イテミヨ」のページ

愛媛県美術館ホームページより

ブロック報告　宮崎県を中心として

梅田一明（うめだ かずあき・宮崎県立美術館）

ブロック報告を見返すと号を重ねてもタイトルにコロナの文字が有り、あらためて感染拡大の凄まじさとともに、その中で奮闘する各館の工夫や情熱を感じている。

この原稿を書いている現在、報道では、重症化しにくい、ピークアウトの気配かなどと伝えられているが、感染状況が高止まり、亡くなられた方も多い状況である。この感染症の影響のもと2年間が経過したが、数ヶ月後の状況は誰も予想できないであろう。よく言うベテランの勘とは、経験値の集積なのだと読んだことがある。これまでの感染症対策で貯まってきた経験値を、今後働かせることができるとよいのだが。

本来、九州ブロックにおける話題に触れるべきであるが、この状況下、県立施設の職員であり、県をまたいだ移動が難しいため、宮崎県を中心とした報告であることをお許し願いたい。宮崎県立美術館からも出品させていただいた、多様な視点で九州の風土から生まれた洋画を示した「九州洋画Ⅱ：大地の力」展（久留米市美術館、2021年9月18日～12月12日）をはじめ、九州各館では地域ゆかりの作品や作家を取り上げた展覧会も多かったのだが、観覧叶わず誠に残念であった。現在も、「豊福知徳寄贈記念展　光の探求」（福岡県立美術館、1月22日～3月13日）、「エビハラがいた時代：1945－1976」（熊本県立美術館、2月25日～3月30日）、「塔本シスコ展　シスコ・パラダイス　かかずにはいられない！人生絵日記」（熊本市現代美術館、2月5日～4月10日）などを手元のフライヤーで見つめるのみで、自由な往来ができないことがうらめしい。

さて、宮崎県では「第35回国民文化祭・みやざき2020」、「第20回全国障害者芸術・文化祭みやざき大会」（2021年7月3日～10月17日）が開催された。これは、2020年度に開催予定であったが、感染症拡大のため1年延期となったものである。本大会においてもコロナ禍の影響は避けられず、オンラインの活用など様々な工夫は行ったものの、関連イベントの中止や変更が多数発生した。積極的に県外からの集客ができる状況にもなく、本県文化の魅力を県外に大きく発信することはできなかった。各関係団体とも、参加の是非を含めた対応を迫られた。しかし、そのことは、文化芸術が果たす役割や自らの活動、イベント等を開催する意味について各団体や個人が自ずと考える機会となり、それこそが本大会の大きなレガシーとなったように感じた。

この一環として、高鍋町美術館では宮崎アーティストファイル「ギフト展」（2021年10月2日～10月17日）が開催された。宮崎アーティストファイルとは、高鍋町美術館が平成27年から取り組む、毎回テーマを設け宮崎在住の作家に光をあてる企画展である。今回は、障がい者アーティストに焦点をあてて、県内在住作家12人と熊本市からゲストアーティスト1人を紹介していた。作品と併せて、学芸員による言葉や、触れることのできる鑑賞キットなどを展示し、作者の表現の様子だけでなく、周囲の人々の関わりや思いなども含め作者と作品を身近に感じられた。日常生活の中で、つくる、行為するという衝動によって生み出され続けている形と色に、個々の存在の強さを感じた。

宮崎県立美術館では「皇室と宮崎～宮内庁三の丸尚蔵館収蔵作品から～」展（2021年10月9日～12月5日）として宮内庁三の丸尚蔵館所蔵の皇室ゆかりの美術工芸品を特別展示した。国文祭・芸文祭を契機としては初めての地方展開であった。同時期に開催した「生誕110年記念 瑛九展 －Q Ei 表現のつばさ－」（2021年10月23日～12月5日）では、宮崎出身の画家瑛九の、表現することへの飽くなき探求の軌跡を多彩な作品と膨大な資料により紹介した。約200点の作品と、約300点の貴重な資料も交えての展示内容で、長時間観覧される方も多く、瑛九と関わりがあったという高齢の方々から、SNSをきっかけに来館された若い方々まで幅広い観覧者層が見られた。

また、都城市立美術館では「日本美術の源流 雪舟・狩野派から近代美術」展（2021年10月30日～12月5日）が開催された。南九州を視点とし、雪舟の流れを汲む作品から水墨画の広がり、狩野派などの近世絵画、西洋美術の流入から近代美術までと、変化し続けた日本美術をたどり、日向、薩摩、大隅が交わる地域である都城の歴史や文化の魅力が感じられる内容である。感染症対策に気を配りつつ全国各館から作品を集められていることにも学芸員の強い思いが感じられた。当館からも戦前、台湾美術展覧会などで活躍した画家塩月桃甫の油彩を出品した。展覧会場の最後の部屋に展示された当館の作品の前で、最初の水墨画からここまでつながったのかとあらためて会場を振り返った。

広い宮崎県内に点在する各美術館の間は遠い。生活の中で気軽に立ち寄られる立地にはない館がほとんどであり、公共交通機関の利便性がよくないため、移動手段は自家用車が中心である。それ自体を目的として移動するに値する美術館であることが必要だ。県内移動をためらわれるほどの感染状況もあったが、逆境を乗り越えた先に、地方の美術館のあり方や新たにできることが見えてくると考え、日々活動を続けていきたい。

宮崎県立美術館「生誕110年記念 瑛九展－Q Ei 表現のつばさ－」 会場風景

社会課題に関心を寄せて意欲的な発表を行う

NO. 1

原爆の図丸木美術館

〒355-0076　埼玉県東松山市下唐子1401

TEL：0493-22-3266
FAX：0493-24-8371
E-mail：info@marukigallery.jp

［開館時間］
午前9時から午後5時まで
（12月～2月は午前9時30分から午後4時30分まで）

［休館日］
月曜日（祝日の場合は翌平日）、年末年始
※GW期間中及び8月1日から15日までは無休）

［開館時期］
1967年5月6日

画家の丸木位里（1901-95）、丸木俊（1912-2000）の共同制作「原爆の図」を常設展示する目的で、1967年に埼玉県東松山市に建設された原爆の図丸木美術館は、画家夫妻の亡きあとも、多くの人びとの支援を受けながら、芸術を通して原爆という未曽有の惨禍の記憶を伝え続けている。

1945年8月6日、位里の故郷の広島に「新型爆弾」が投下されたという知らせを聞いた位里と俊は、焼け野原となった広島に駆けつけ、その惨状を目の当たりにした。そして敗戦から5年後の1950年に、生きながら焼かれた人間の群像に焦点を当て、水墨を基調に描かれた高さ1.8m、幅7.2mの大作が、最初の「原爆の図」となる第1部《幽霊》であった。米軍を中心とする連合国軍の占領下で原爆報道が禁じられていた時代、そして朝鮮戦争という新たな戦争が勃発した時代への抵抗として、「原爆の図」は当時の社会に衝撃を与え、同年のうちに3部作が完成、すぐに全国巡回展もはじまった。その後はヨーロッパやアジア、オセアニアなどで20ヶ国以上を巡回し、1964年に帰国したのちに作者の生活の拠点とともに美術館が建設された。

水墨の前衛表現を拓いた丸木位里と、卓越した人物描写が持ち味の丸木俊の共同制作という試みは、「日本画」と「洋画」といった既存の画壇の枠組を越境する新たな表現を生み出した。また、自身の体験だけでなく、数多くの他者の記憶に耳を傾ける作者の姿勢は、大画面の絵画に多声的な構造をもたらした。30年以上に及んで継続され、15部の連作となった「原爆の図」（第15部《ながさき》のみ長崎原爆資料館蔵）からは、やがて戦争の被害だけではなく、加害と被害の複雑な両面性や、公害や差別など有形無形の暴力の根源を探求する新たなテーマの共同制作が派生していった。

丸木美術館では、こうした位里と俊の共同制作を中心に展示しつつ、位里の水墨画や俊の油彩画、絵本原画など個人のそれぞれの芸術活動、そして70歳を過ぎて絵筆をとった位里の母・丸木スマ（1875-1956）の自由奔放な自然讃歌の絵画なども紹介している。

また、近年では、現在の社会課題に関心を寄せて意欲的な発表を行う現代美術家の多様な表現の展示を積極的に企画し、「原爆の図」の歴史的背景や絵画技法や素材の研究にも力を注ぐなど、位里と俊の芸術の本質を再検証し、今日的に継承していく活動も行っている。

（岡村幸宣・おかむらゆきのり）

市民とアートが出会う場所

NO. 2

横浜市民ギャラリー

〒220-0031　神奈川県横浜市西区宮崎町26-1

TEL：045-315-2828
FAX：045-315-3033
E-mail：ycag@yaf.or.jp

［開館時間］
午前10時から午後6時まで（展覧会の開催時間は展覧会毎に異なる）

［休館日］
原則毎月第3月曜日、年末年始

［開館時期］
2014年10月10日

横浜市民ギャラリーは1964年に開設され、日本で最初に「市民ギャラリー」を冠した施設といわれている。旧横浜市中区庁舎（1964～74年）、横浜市教育文化センター（1974～2013年）と二つの所在を経て、2014年10月から現在の地で運営を行っている。

企画展や講座等の主催事業と市民美術団体を対象とした展示室やアトリエの貸出を両輪に、横浜市の芸術文化発展の一端を担ってきた長い歴史を有する。

主催事業として、1964年から40年間にわたり多角的に同時代の表現を取り上げ、現代美術を考察してきた「今日の作家展」を継承する「新・今日の作家展」、開館以来の展覧会等を機に収蔵されてきた約1,300点の所蔵品からテーマに沿った構成で作品紹介を行う「コレクション展」、子どもたちの自由な発想と豊かな表現を育み、健やかな成長を応援する「横浜市こどもの美術展」という3つの展覧会を軸に、専門的な創作活動やレクチャーを楽しむ「大人のためのアトリエ講座」、造形を中心とする子どもたちの自立につながる体験ワークショップ「ハマキッズ・アートクラブ」等の教育普及事業を展開している。

一方、美術を中心とした市民の創作活動発表の場としての貸館利用も活発に行われている。展示室（計1,146㎡）は4フロアー、最大6室に分割可能、アトリエ（146.8㎡）は水場、更衣室等が備えられており、多様な目的での使用が可能である。

所蔵作品は、約1,300点にのぼり油彩（岡本太郎、江見絹子、川村信雄）、日本画（牛田雞村、岡本彌壽子、入江正巳）、写真（奥村泰宏、常盤とよ子、浜口タカシ）、版画（長谷川潔、馬場櫂男、池田龍雄）、彫刻（井上信道）、立体（菅木志雄）、水彩・素描（三橋兄弟治、國領經郎、添田定夫）、漫画（柳原良平、やなせたかし、ヒサクニヒコ）、書（青木香流、野田蘭洞）等と分野・作家が多岐にわたっている。作品制作年は、70年代から90年代が大半を占め、横浜を中心とした国内の美術史や横浜の美術シーンを反映している。

市民が事業運営に参画するボランティア制度や学生が職業体験を通して企画立案や施設運営を学ぶインターンシップ、若手作家への施設利用料の一部減免や広報協力を通した支援、近隣施設や地元地域団体との連携及び教育機関へのアウトリーチにも注力しており、様々な角度から「芸術文化活動のコーディネーター」として、「市民とアートが出会う場の創出」に貢献すべく努めている。

（森井健太郎・もりいけんたろう）

NO. 3

市民が気軽にアートや音楽に触れる場所

横浜市民ギャラリーあざみ野

〒225-0012　横浜市青葉区あざみ野南 1-17-3　アートフォーラムあざみ野内

TEL：045-910-565
FAX：045-910-5674
E-mail：info@artazamino.jp

［開館時間］
午前 9 時から午後 9 時まで（展覧会の開催時間は展覧会ごとに異なる）

［休館日］
毎月第4月曜日、年末年始

［開館時期］
2005 年 10 月 29 日

横浜市民ギャラリーあざみ野は、アートを通して人と人とが交流する市民と創造活動の「出会いの場」をつくることを目的に 2005 年に開館した。当館がある「アートフォーラムあざみ野」は、「横浜市男女共同参画センター 横浜北」が併設される複合施設で、地域を中心に、親子連れからお年寄りまで幅広い層の方に利用されている。

当館が収蔵管理する「横浜市所蔵カメラ・写真コレクション」は、アメリカのサーマン・F. ネイラー氏（1919-2007）が世界各地から収集した、写真の黎明期から 20 世紀末までのカメラや写真の発展を辿る貴重な資料・作品群で、その数は約 10,000 件にのぼる。横浜が日本における写真発祥の地の一つとして近代日本の写真映像文化の発展に大きく貢献した歴史を踏まえて、横浜市がこのコレクションを取得し、当館が 2006 年からその保存活用事業を受託している。現在、それらの調査研究を進めつつ、展示やデータベースによって公開している。

当館では、展示室やアトリエを市民利用の場として提供するほか、それらの施設を利用して多彩な自主事業を展開している。展覧会としては、未就学児から小学校低学年を対象とした「あざみ野こどもぎゃらりぃ」、様々なジャンルの現在進行形のアートを紹介する「あざみ野コンテンポラリー」、そして写真表現の現在を切り取る企画展と所蔵するカメラや写真作品を公開するコレクション展で構成される「あざみ野フォト・アニュアル」を毎年開催している。また、市民が気軽にアートに触れる場としてエントランスロビーを活用し、テーマごとに所蔵コレクションを紹介する「ギャラリー・イン・ザ・ロビー」と若手の現代作家を取り上げる「ショーケースギャラリー」といったミニ展示を実施。更に、「フェローアートギャラリー」として、障がいのあるアーティストや社会福祉施設で創作活動をしている方たちの作品を展示している。それらの展覧会出品作家へのインタビューを含むアーカイブは、現代美術の貴重な資料となっている。

教育普及事業にも力を入れており、アトリエ施設を使った親子のフリーゾーンをはじめ、子どもや大人向けの多彩な造形講座を開催するほか、小中学校へのアウトリーチにも取り組んでいる。また、世代を超えた人が集い学ぶ場として、多様なジャンルの芸術や地域の文化を学ぶ「あざみ野カレッジ」を開講。日曜日には、横浜を中心に活躍する音楽家によるミニコンサートをロビーで開催し、身近に音楽を楽しむ場として地域の方々に親しまれている。

（沼田英子・ぬまたひでこ）

NO. 4

四季折々の自然のなかで棟方志功と石崎光瑤に出会う美術館

南砺市立福光美術館

〒939-1626　富山県南砺市法林寺 2010

TEL：0763-52-7576
FAX：0763-52-7515
E-mail：fukumitsu-museum@city.nanto.lg.jp

［開館時間］
午前 9 時から午後 5 時まで（入館は午後 4 時 30 分まで）

［休館日］
火曜日（祝日の場合は開館し、翌日休館）、
年末年始（12 月 29 日～1 月 3 日）

［開館時期］
1994 年 10 月

福光美術館は、1994 年福光町立として開館し、2004 年の町村合併により南砺市立福光美術館となった。富山県の南西、世界文化遺産の五箇山合掌造り集落を有する南砺市に位置し、石川県金沢市にまたがる医王山に接した、里山の豊かな緑と野鳥のさえずりが聞こえる大自然に包まれた美術館である。

開館以来、旧福光町ゆかりの版画家棟方志功（1903-75）と、旧福光町で生まれ京都画壇で活躍した日本画家石崎光瑤（1884-1947）を中心に、彫刻家松村秀太郎（1888-1971）など郷土ゆかりの作家をはじめ、内外の現代作家まで幅広く作品・資料の収集・展示を行っている。

棟方志功は、民藝運動の提唱者の柳宗悦、河井寛次郎、浜田庄司らに見出され親交を深め、ヴェネチア・ビエンナーレなど国内外の美術展で高い評価を受けるなど、我が国を代表する版画家として活躍。1945 年から 1951 年まで 6 年 8 ヶ月の間、戦火を避けるため旧福光町に疎開し、数々の代表作を制作した。

石崎光瑤は、幼少の頃から画家を志し、琳派の山本光一のもとで日本画の基本を学んだあと京都画壇の重鎮竹内栖鳳に師事。《熱国妍春》、《燦雨》と連続して官展特選を受賞し、大正・昭和を代表する、華麗な花鳥画の日本画家として活躍した。

当館では 2015 年に新常設展示室を増築し、棟方志功作品と石崎光瑤の展覧会出品作を中心に多数展示している。また 2 階コレクション室では、日本画、洋画、工芸など多彩な所蔵作品を展示公開している。

企画展では棟方や石崎光瑤関連の企画をはじめ、南砺に伝えられた宝というべき美術品や資料、南砺ゆかりの作家の紹介などとともに、全国公募による版画年賀状公募展やアート・キルト展なども実施している。

分館である棟方志功記念館 愛染苑は、棟方の良き支援者であり理解者であった石崎俊彦から寄贈された棟方作品や資料をもとに、棟方が疎開中暮らしていた場所に 1982 年に開館した。また 2001 年に愛染苑に移築された棟方の旧居「鯉雨画斎」では、家の中の厠（トイレ）の壁から天井まで菩薩や天女が描かれ、さらに画室の板戸にも鯉の滝登りや鯰や亀が生き生きと描かれており、初めて持ち家を得た棟方の喜びを感じることができる。

四季折々の自然の中で、悠然とした空間が楽しめる福光美術館として、豊かな美術鑑賞の時間をこれからも提供してきたい。

（石元 裕・いしもとゆたか）

NO. 5

民に知的な刺激を与え、広大な市域を活性化

真庭市蒜山ミュージアム

〒717-0602　岡山県真庭市蒜山上福田 1205-220 GREENable HIRUZEN 内

© 川澄・小林研二写真事務所

TEL：0867-42-1178（真庭市生活環境部スポーツ・文化振興課）
FAX：0867-42-1416
E-mail：sportsbunka@city.maniwa.lg.jp

［開館時間］
午前 9 時から午後 5 時まで（入館は午後 4 時 45 分まで）

［休館日］
毎週水曜日（祝日の場合は翌平日）、展示替期間等

［開館時期］
2021 年 7 月 15 日

人と自然の共存が体感できる文化・芸術をテーマとする真庭市蒜山ミュージアムは、建築家・隈研吾が設計を手掛けた真庭市蒜山観光文化発信拠点GREENable HIRUZEN(グリーナブル蒜山)を構成する施設。象徴的な外観のパビリオン「風の葉」などと同じく、今注目されている集成木材「CLT（Cross Laminated Timber：直交集成板）」を用いた建築である。

パビリオンとミュージアムの建物は、2019 年 12 月から 2020 年 9 月まで東京・晴海にあった「CLT PARK HARUMI」を移築したもので、当初からそれを前提とした設計となっている（ただし設計時には美術作品を展示するという要件はなかった）。使われている CLT は真庭産のスギやヒノキを真庭市内の工場で加工したもので、移築には「里帰り」という意味合いもある。

ミュージアムという名称だが所蔵作品は持たず、現在活躍中のアーティストたちによる現代美術の自主企画展と、隈研吾建築都市設計事務所より寄託された建築資料の展示を核とするアートセンターに近い施設である。開館後 2 回は隈研吾展を開催、第 3 回展以降は、現代（現在）美術の個展や 2、3 人展をメインに、1、2 室で建築資料の展示を同時開催するスタイルを基本とし、年 3 回程度の展覧会を開催する予定である。

また、ほとんどの作家が存命であるという現在の美術の強みを活かし、展覧会やワークショップなどのイベントのみならず、地域・自然・教育などとつながりながら多様な活動を展開することを計画している。具体的には有形・無形の地域資源と現代美術のコラボレーション、学校へのアーティストや美術関係者の派遣・授業等のコーディネート、市民などと現代美術家の協働によるプロジェクト、市内外の文化施設や文化組織と連携したイベントなどを想定している。またその様子や成果についてもミュージアムで展示・公開していく予定である。

蒜山高原は西日本ではよく知られている観光地である（おそらく真庭という市名より知名度は高い）。一方、真庭市は蒜山地区の 3 村を含む 9 町村が合併してできた広大な（岡山県内の市町村で最大面積）市域を持つ。そのため一つの市といっても地域によって主要産業や風土、伝統、文化も多様で、抱える問題もまた多岐にわたる。真庭市蒜山ミュージアムは観光地の文化施設として多くの人を迎え入れるとともに、地域にかかわる活動を通じて、市民に知的な刺激を与え、活性化していくことを目指している。

（三井知行・みついともゆき）

NO. 6

芝生を臨む広々とした空間に 2025 年春開館予定

鳥取県立美術館（美術館整備局）

〒682-0816　鳥取県倉吉市駄経寺町 212-5

TEL：0858-47-3011
FAX：0858-47-3022
E-mail：bijyutsukan-seibi@pref.totttori.lg.jp

［開館時間］
未定

［休館日］
未定

［開館時期］
2025 年春

鳥取県では 1972 年に開館した鳥取県立博物館の美術部門を独立させるかたちで、新しく鳥取県立美術館を設置する。県立レヴェルでは最後発となる鳥取県立美術館は県中部、倉吉市の史跡大御堂廃寺跡の緑の芝生を臨む広々とした空間に 2025 年春の開館を予定している。

鳥取県立美術館は美術館としては日本でも初めてとなる建築と運営を一体化した PFI 方式によって整備が進められ、設計は数々の建築で世界的に知られた槇総合計画事務所が担当している。張り出した大屋根と南に向いた明るいガラス張りの空間が印象的な地上 3 階、延床面積 10,598㎡の建築はすでに着工しており、来年春には建築の全体が明らかとなる予定である。一階部分には「ひろま」と呼ばれる広々としたフリーゾーンを設け、展覧会の鑑賞を目的としない方々にも自由に楽しんでいただくスペース、さらに複数のワークショップルームやキッズルームも設けている。新しい美術館では 3 階の企画展示室に加え、2 階にジャンルごとに 5 つの常設展示室、広い収蔵庫を設け、県立博物館時代より念願であった常設展示の大幅な拡充と狭隘化していた収蔵庫の解消をはかった。これによってこれまで必ずしも十分でなかったコレクションの紹介が進むことが期待できる。

美術館のコレクションとしては、県立博物館の 1 万点におよぶ美術コレクションを移管するかたちで、近世絵画から現代美術にいたる多様な作品を収蔵し、とりわけ鳥取県出身の洋画家前田寛治、彫刻家辻晉堂については網羅的な収集を行い、写真家塩谷定好や植田正治についても多くの代表作を収蔵することになる。県立博物館では県立の施設という制約上、収集方針として鳥取県とゆかりのある作品を収集の対象としていたが、美術館の開館を機にさらに近現代の国内外の優れた作品、同時代の美術の動向を示す作品についても新たに収集の対象としてコレクションを充実させたいと考えている。

さらに鳥取県立美術館の特色として、美術館教育、普及活動をさらに拡大させ、子どもたちをはじめ、一般の人、障がいのある人や外国の人などすべての人々に美術を通した様々な学びを得ていただく機会を提供するアート・ラーニング・ラボ（ALL）を美術館の主要な機能の一つとして展開していく予定であり、現在、そのための試行的な事業を県立博物館で進めている。

新型コロナウイルス感染症のパンデミックという逆境下での船出となったが、幸いにも今のところ建築部門、運営部門ともに順調に建設と協議が進んでいる。再び何の気兼ねなく旅行や交流が可能となった頃に、日本最後発の県立美術館として、満を持して皆様をお迎えできることを楽しみにしている。

（尾崎信一郎・おざきしんいちろう）

全国美術館会議の活動は以下の賛助会員各社の支援を受けております。
会員各社のお名前を記して、心より感謝を申し上げます。

株式会社集英社［出版業］

カトーレック株式会社［一般貨物自動車運送業］　株式会社DNPアートコミュニケーションズ［サービス業］

株式会社伏見工芸［展示装飾業］　ヤマト運輸株式会社［美術品輸送］

株式会社アート・ベンチャー・オフィス ショウ［美術展企画等］
有限会社イー・エム・アイ・ネットワーク［展覧会企画制作］
イセ文化財団［芸術・文化振興］
株式会社NHKエデュケーショナル［映像を中心とするコンテンツ制作］
株式会社NHKプロモーション［展覧会等のイベントの企画・制作］
株式会社加島美術［美術商］
協同組合美術商交友会［美術業界団体］
株式会社グッドフェローズ［Webチケット販売、発券精算システム］
株式会社クレヴィス［展覧会企画・出版］
株式会社広済堂ネクスト［情報・印刷］
金剛株式会社［製造業（保管機器・鋼製家具製造）］
進和テック株式会社［ガス対策機器販売］
せとうち美術館ネットワーク［運輸業］

一般社団法人全国美術商連合会［美術業界団体］
公益財団法人ダイキン工業現代美術振興財団［製造業］
大日本印刷株式会社［総合印刷業］
株式会社東京美術倶楽部［貸会場業等］
凸版印刷株式会社［製造業］
株式会社トップアート鎌倉［額縁額装・画材］
ピープルソフトウェア株式会社［情報通信業］
株式会社美術出版社［出版事業］
有限会社丸栄堂［美術商］
株式会社ユニークポジション［情報サービス業］
株式会社レンブラント［画廊］
早稲田システム開発株式会社［ミュージアム向けIT サービス提供］

アート印刷株式会社［デザイン・印刷・出版業］
イカリ消毒株式会社［サービス業］
M&Iアート株式会社［美術商］
株式会社ギャルリーためなが［画廊］
日本写真印刷コミュニケーションズ株式会社［印刷業］
読売新聞東京本社［新聞］
ライトアンドリヒト株式会社［照明器具販売］

有限会社アート・フリース［グッズ制作・販売］
株式会社アートローグ［コンサルティング業］
影山　幸一［アートプランナー］
株式会社学研プラス［出版］
株式会社求龍堂［出版・デザイン業］
株式会社キュレイターズ［企画・デザイン・コンサルタント］
株式会社生活の友社「美術の窓」「アートコレクターズ」［出版社］
株式会社丹青研究所［サービス業（コンサルタント）］
株式会社TTトレーディング［HOGOS］
トライベクトル株式会社［翻訳サービス業］
株式会社美術年鑑社「新美術新聞」［出版業］

IPMを取り入れた保存環境づくりと
虫・カビの防除で文化財を守りましょう。

公益財団法人 文化財虫菌害研究所
〒160-0022　東京都新宿区新宿二丁目1番8号 新宿フロントビル6F
TEL　03（3355）8355　　FAX　03（3355）8356　　www.bunchuken.or.jp

LC ecosys
Life Creation
Life Cycle Assessment
Ecological System

文化財と人と環境を第一に。

文化財保存分野に参入してから40余年、守り続けたものがある。

長年の経験と実績により、博物館・美術館等それぞれの施設環境に
合わせた文化財IPM（総合的有害生物管理）プランをご提案いたします。

調査・診断
現状調査・診断／設計
原因究明・検査／分析

防除・メンテナンス
モニタリング
殺虫／殺カビ
IPM メンテナンス

その他サポート
教育研修支援
IPM 構築支援
関連商品販売

環境エンジニアリング　全国100事業所
IKARI イカリ消毒株式会社　https://www.ikari.co.jp

本　社　｜〒151-0051　東京都渋谷区千駄ヶ谷5-27-11　TEL. 03-3356-6191　FAX. 03-3350-1405
大阪オフィス　｜〒542-0076　大阪府大阪市中央区難波5-1-60　TEL. 06-6636-2741　FAX. 06-6636-2720

第 2 回定時社員総会及び
令和 4 年度第 2 回理事会等について

事務局次長　生島達久（おじま たつひさ）

令和 4（2022）年 6 月 2 日（木）、山梨県甲府市において開催された、社団法人化後の第 2 回定時社員総会及び臨時社員総会並びに令和 4 年度第 2 回理事会及び臨時理事会についてご報告します。

社員総会に先立ち、同日の午前中、ベルクラシック甲府「ヴィクトリア」において、令和 4 年度第 2 回理事会が開催され、第 1 回理事会開催（4 月 28 日）後の正会員入会申込、後援することが初めてとなる機関からの後援依頼についての審議が行われ、理事会において承認・決議されました。また報告事項として定款第 42 条第 2 項に基づく会長からの職務執行状況の報告、日本美術家連盟との著作権に関する協議状況、博物館法改正に関する現状、国立国会図書館への機関情報の提供、図書館等講習送信サービスに関する関係者協議計 5 件の報告の他、今後の検討課題等について話し合われ、閉会しました。

その後、13：00 からベルクラシック甲府「エリザベート」において、山梨県立美術館を担当館とし、同館の青柳正規館長の議長により開催された総会では、文化庁の井上文化戦略官から祝辞の後、正会員館 110 館の出席（議決権行使 180）により法人化後初めての対面による社員総会が行われ、まず令和 3 年度事業報告及び収支決算、令和 4 年度事業計画及び収支予算が決議され、令和 4 年度の入会申込正会員として、原爆の図丸木美術館、横浜市民ギャラリー、横浜市民ギャラリーあざみ野、南砺市立福光美術館、真庭市蒜山ミュージアム、鳥取県立美術館（美術館整備局）の 6 館、入会申込個人会員 4 名が新たに承認・入会となり、正会員館は 406 館、個人会員 36 名となりました。

また、今年度は 2 年任期となる役員（理事）の改選期となりますが、副会長の出川哲朗大阪市立東洋陶磁美術館名誉館長、理事の佐藤友哉札幌芸術の森美術館長、草薙奈津子平塚市美術館特別館長、雪山行二富山県美術館長、長谷川三郎島根県立美術館長の 5 名の方が退任されるため、新任予定の佐藤幸宏札幌芸術の森美術館長、菅野洋人郡山市立美術館長、山梨絵美子千葉市美術館長、松本透長野県立美術館長、菅谷富夫大阪中之島美術館長の 5 名及び再任予定の理事 20 名並びに監事 2 名の新任役員候補者について審議が行われ、新役員が選任され、閉会しました。

その後、新役員による臨時理事会の開催のため午前中に理事会を開催した「ヴィクトリア」へ場所を移し、引き続き会長に埼玉県立近代美術館の建畠哲館長が選任されました。建畠会長から副会長に国立新美術館の逢坂恵理子館長、徳川美術館の徳川義崇館長の再任、新任として長崎県美術館の小坂智子館長の 3 名が指名されました。各専門委員会についても改選期となり、企画委員長には、富山県美術館の雪山行二館長の後任として国立国際美術館の島敦彦館長が選出され、企画委員及び各研究部会長は変更なく全員再任されました。広報委員長には、東京ステーションギャラリーの冨田章館長が再任されました。また、災害対策委員は、委員全員の継続が承認され、委員長は宇都宮美術館の佐々木吉晴館長の再任が決定され、閉会となりました。

引き続き、社員総会の会場である「エリザベート」において、臨時社員総会が行われ、会長、副会長、専門委員会委員長及び委員選定の報告、専門委員会及び研究部会の活動報告の後に日本美術家連盟との著作権に関する協議状況、博物館法改正に関する現状についての報告が行われ、閉会しました。

同所において、臨時社員総会に続き、韮崎大村美術館の大村智館長による特別講演会「小さいまちの小さな美術館〜志は高く〜」が開かれました。ノーベル医学・生理学賞を受賞した大村智館長は、個人で収集されていたコレクションを人類全ての共通財産として広く展示公開する目的で故郷である韮崎市へ美術館を建設され、その後、韮崎市へ寄贈された方で、その後も館長として、美術館の運営に携わり、女流芸術家たちの作品を中心に据えた展示、戦後日本画壇を代表する洋画家や近代以降の陶磁器コレクションの形成など、大変有意義なお話をお聞かせいただくことができました。

また、特別講演会後の情報交換会の冒頭においては、公務により社員総会で歓迎挨拶をいただくことができなかった長崎幸太郎山梨県知事からご挨拶をいただきました。

総会 2 日目の 6 月 3 日は、総会開催の担当館をお願いしました山梨県立美術館の美術館視察と特別企画として「美術館とアートマーケット」をテーマとしたシンポジウムが行われました。シンポジウムでは、山梨県立美術館の青柳正規館長に司会進行をお願いし、パネリストとして、アーティゾン美術館の笠原美智子副館長、スカイザバウハウスの白石正美代表、文化庁の平山直子企画調整課長、滋賀県立美術館の保坂健二朗館長が登壇され、それぞれの立場からのお話の後に質疑応答などが行われました。

また、希望者のみの参加となりますが、歓迎行事として特別講演会の講師をお受けいただきました大村智館長の韮崎大村美術館と山梨県立美術館の美術館視察が行われました。

総会の準備と実施にご尽力をいただきました山梨県立美術館と特別講演会及び見学の受入をいただきました韮崎大村美術館の皆様に改めて御礼申し上げます。

最後になりますが、第 3 回定時社員総会は、愛知県美術館、名古屋市美術館、徳川美術館の 3 館を担当館として、来年 5 月 25 日、26 日に名古屋市で開催予定ですので、新型コロナの収束を願いつつ、会員館の皆様の参加により年に 1 度の社員総会が有意義になるようよろしくお願いします。

「全国美術館会議：緊急時のための常備用資機材リスト」の作成と公開

災害対策委員　邊牟木尚美（へむき なおみ・国立西洋美術館）

日本は自然災害の発生件数が他国に比べて大変多く、特に近年は著しく増加傾向にある。1995年1月17日の阪神淡路大震災による地震被害、2011年3月11日の東日本大震災による地震・津波被害などに加え、2019年10月12日の関東地方を襲った台風19号による水害では川崎市市民ミュージアムで多くの文化財や美術品が被災したことは記憶に新しい。

全国美術館会議（以下、全美）では、災害発生時には災害対策委員会を中心として被災状況の情報収集を行い、全美正会員館職員の協力を得ながら、全美所有の緊急時レスキュー資機材を持ち込んで、被災美術品の救援活動を行ってきた。全美所有の資機材は、阪神淡路大震災発生時に、既に国立西洋美術館に備え付けられていた「仮処置救急箱」内の資機材に加え、現地で使用が見込まれる資機材を持ち込んだものを原点としている。調査・救援活動終了後、1996年5月に刊行した『阪神大震災美術館・博物館総合調査 報告Ⅱ』に「緊急調査・応急処置用資材リスト」として公開されている[1]（作成：田中千秋、田中善明）。

2019年の被災直後から全美でもレスキュー支援活動を継続している川崎市市民ミュージアムでは、被災収蔵品の緊急搬出や応急処置といった初期段階の作業がおおかた終了した2020年10月から12月にかけて、全美所有の緊急時のレスキュー資機材を総点検、補充、再リスト化した。その際、「平時からの災害時に備えて、各館が常備した方がよいと思われる資機材リストを作成・公開してはどうか」という案が持ち上がり、全美災害対策委員会はワーキンググループを立ち上げ[2]、2021年12月から5ヶ月間かけてリスト作成を行ってきた。完成したリストは、2022年5月31日に全国美術館会議ウェブサイトに掲載し、誰でも閲覧できるように公開した。

https://www.zenbi.jp/rescue/link/material.php

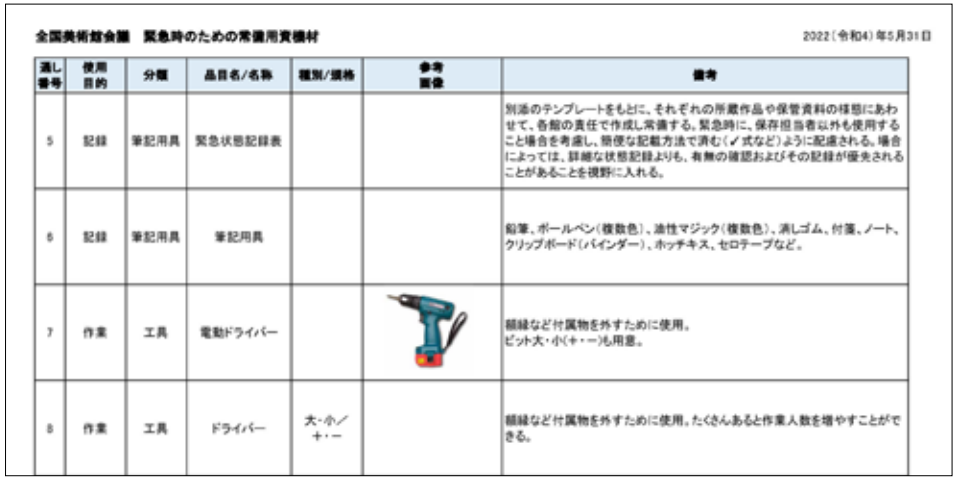
本リストは「緊急時のための常備用資機材リスト」と称し、被災美術品の緊急搬出や、余震などの二次被害防止のための措置のみを目的としている。美術館が災害（特に自然災害）発生時に、初動で利活用できる資機材に厳選した。緊急搬出後の応急処置は、保存修復専門家が立ち会って指導する場合が多いことから、応急処置用の専門的な資機材はリストから省くこととした。また、災害は保存修復専門家や学芸員がいる時に発生するとは限らないため、全ての美術館職員が理解できるよう解説をつけ、あまり馴染みのない資機材や選択肢が多い資機材にはイラストや画像を掲載するなどの工夫をした。

さらに、本リストは、今後、追加や修正を行って「育てていく」予定である。現段階では保留事項も含んでおり完璧な状態ではない。多少不完全であっても、少しでも早く公開し、一つでも多くの館に備えをしてもらうことを目指している。災害はいつ発生するかわからず、いつ自館が被災するとも限らない。災害に備え、各正会員館、あるいは都道府県域本部館等、または広域ブロックで、資機材を常備されたい。リスト内全ての資機材を網羅的に揃えることは難しくとも、各館の所蔵品の種類や性質に合わせて、また地域の美術館どうしで共有できる資源として常備されることを願っている。

1　このリストは文化庁のホームページでも公開されている。https://www.bunka.go.jp/earthquake/taio_hoho/pdf/jyoho_04.pdf

2　作成ワーキングメンバー（以下9名）
邊牟木尚美（チーフ、災害対策委員、国立西洋美術館）
貝塚健（サブ、災害対策副委員長、石橋財団アーティゾン美術館）
伊藤由美（神奈川県立近代美術館）
小林豊子（総務担当幹事、全国美術館会議事務局）
杉浦央子（川崎市市民ミュージアム）
田中善明（災害対策委員、サイトウミュージアム）
橋口由依（神奈川県立近代美術館）
浜田拓志（個人会員、国立文化財機構文化財防災センター）
遊免寛子（兵庫県立美術館）

全国美術館会議ウェブサイトでの資機材リスト公開のページの様子


全国美術館会議　緊急時のための常備用資機材　2022（令和4）年5月31日

通し番号	使用目的	分類	品目名／名称	種別／規格	参考画像	備考
5	記録	筆記用具	緊急状態記録表			別添のテンプレートをもとに、それぞれの所蔵作品や保管資料の様態にあわせて、各館の責任で作成し常備する。緊急時に、保存担当者以外も使用すること場合を考慮し、簡便な記載方法で済む（✓式など）ように配慮される。場合によっては、詳細な状態記録よりも、有無の確認およびその記録が優先されることがあることを視野に入れる。
6	記録	筆記用具	筆記用具			鉛筆、ボールペン（複数色）、油性マジック（複数色）、消しゴム、付箋、ノート、クリップボード（バインダー）、ホッチキス、セロテープなど。
7	作業	工具	電動ドライバー			額縁など付属物を外すために使用。 ビット大・小（＋・－）も用意。
8	作業	工具	ドライバー	大・小／＋・－		額縁など付属物を外すために使用。たくさんあると作業人数を増やすことができる。

公開した資機材リスト（一部）

賛助会員、個人会員の皆さまへ

このたび、ZENBI 全国美術館会議機関誌の投稿規定を改定しました。新しい投稿規定は右記のとおりです。
次号（vol.23）より、「全美フォーラム」について、正会員の職員以外にも個人会員、賛助会員からの投稿を広く募ることといたします。多くの立場からの活発な投稿をお待ちしております。
同様に個人会員、賛助会員の皆さまへの特典強化の一環として、機関誌や全国美術館会議ホームページでの賛助会員のご紹介を充実させていく予定です。まずは機関誌で本号（vol.22）より業種の掲載を開始しました。
また、ホームページは現在正会員以外には閲覧制限がなされていますが、個人会員、賛助会員の方に対しては制限を緩和すべく、当委員会で準備を進めているところです。
今後も一層のご支援、ご協力をお願いいたします。　広報委員会

『ZENBI』では、次の要領で広く皆さんからの原稿をお待ちしています。

［原稿の内容］
- 展覧会、普及活動など美術館の活動に対する批評を受けつけます。
- 原則として具体的に対象を限定した批評をお寄せください。
- 原稿には表題を付してください。

［投稿の資格］
- 全国美術館会議正会員の職員であればどなたでも投稿できます。
- 匿名の投稿は受けつけません。

［投稿に係る詳細］
- 原稿の形式、許諾、著作権等については投稿規定を参照ください。

［締切］
- 第 23 号（2023 年 1 月発行予定）については 10 月 31 日、
  第 24 号（2023 年 7 月発行予定）に関しては 4 月 30 日を締切とします。（当日必着）

［提出先］
s-osaki@pref.tottori.lg.jp（尾﨑）
aoyama_k@nmao.go.jp（青山）

［問い合わせ先］
内容に関する問い合わせについては下記まで御連絡ください。
〒680-0011 鳥取市東町 2-124　鳥取県立博物館内
（一社）全国美術館会議広報委員 尾﨑信一郎
s-osaki@pref.tottori.lg.jp　TEL 0857-26-8042

ZENBI 全国美術館会議機関誌 投稿規定

制定：平成 23 年 7 月 24 日
改正：令和 4 年 1 月 31 日
全国美術館会議広報委員会

1. 全般事項
（1）本誌への投稿者は原則として下記に限る。
　ア 全国美術館会議正会員が所属する館の職員
　イ 全国美術館会議個人会員
　ウ 全国美術館会議賛助会員の職員
（2）投稿原稿は他誌（電子媒体を含む）に発表されてないものに限る。
（3）原稿（写真を含む）は原則として電子メールで提出すること。
（4）原稿は原則として 2,000 字程度とする。

2. 投稿文の採否
（1）投稿文の採否、掲載順などは（一社）全国美術館会議広報委員会（以下「広報委員会」という。）に一任とする。
（2）掲載が決定した場合は、その旨を投稿者に通知する。

3. 原稿について
（1）原稿は原則として常用漢字を用いることとし、である調とすること。
（2）引用した文献は、本文中において該当箇所の右肩に順次番号をつけ、その番号を引用順に列挙すること。
（3）個人を同定しうる顔写真等を掲載する場合は、本人等の承諾を必ず得ること。
（4）投稿文にはできる限り画像の掲載をお願いするが、著作権許諾及び著作権料の支払いが必要な場合は投稿者が責任を持って処理すること。

4. 校正について
校正については、初校をもって著者校正とする。その後は広報委員会の責任とする。

5. 著作権について
（1）本誌に掲載された投稿文の著作権は（一社）全国美術館会議に帰属するものとする。
（2）掲載後の投稿文について著者自身が活用するのは自由とする。ただし、出典（掲載誌名、巻号ページ、出版年）を記載するのが望ましい。

6. その他
（1）原稿料は支払わない。
（2）掲載投稿一編につき、本誌 5 部を進呈する。

編集後記

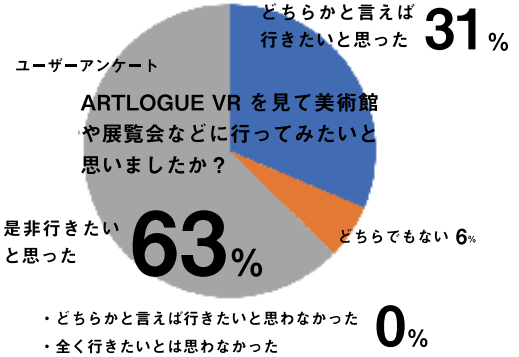
『ZENBI』の 22 号をお届けする。長きにおよぶ新型コロナウイルス感染症の影響もようやく落ち着きをみせ、私たちは文字通り「ウイズ・コロナ」の時代に入りつつある。コロナ一辺倒であったブロック報告に関しても、ようやくコロナ以外の時事的な話題が含まれるようになった。今年度の総会も 3 年ぶりに対面形式で実施されたことは「事務局から」にあるとおりだ。しかしながら作品を運び、人を集めるという展覧会の本質に対して、パンデミックが真向から対立するものである以上、美術館や展覧会に携わる者にとっても厳しい時期が続くことを覚悟しなければならない。関連した新しい試みや工夫については本誌においてもどんどん紹介していきたいと考えている。投稿をお待ちしている。
『ZENBI』ではこれまで全美フォーラムへの投稿資格を正会員館の職員に限定していたが、次号より個人会員、賛助会員にも広げることとした。会員としての特典を増やすことと、さまざまな立場から美術館に対して発言していただくことを目的としている。困難な時期であるからこそ、多様な視点や価値観を共有したいと考える。多くの方々の積極的な投稿を期待している。（O）

文化庁「文化芸術収益力強化事業」採択実績事業

ARTLOGUE VR β
アートローグ VR

オンライン3DVRで展覧会を鑑賞

ミュージアム 3.0 時代の到来
Matterport（マーターポート）によるコンテンツ制作で
美術館の DX 化をお手伝い致します



Matterport（マーターポート）で有料配信出来るのは ARTLOGUE VR β だけです

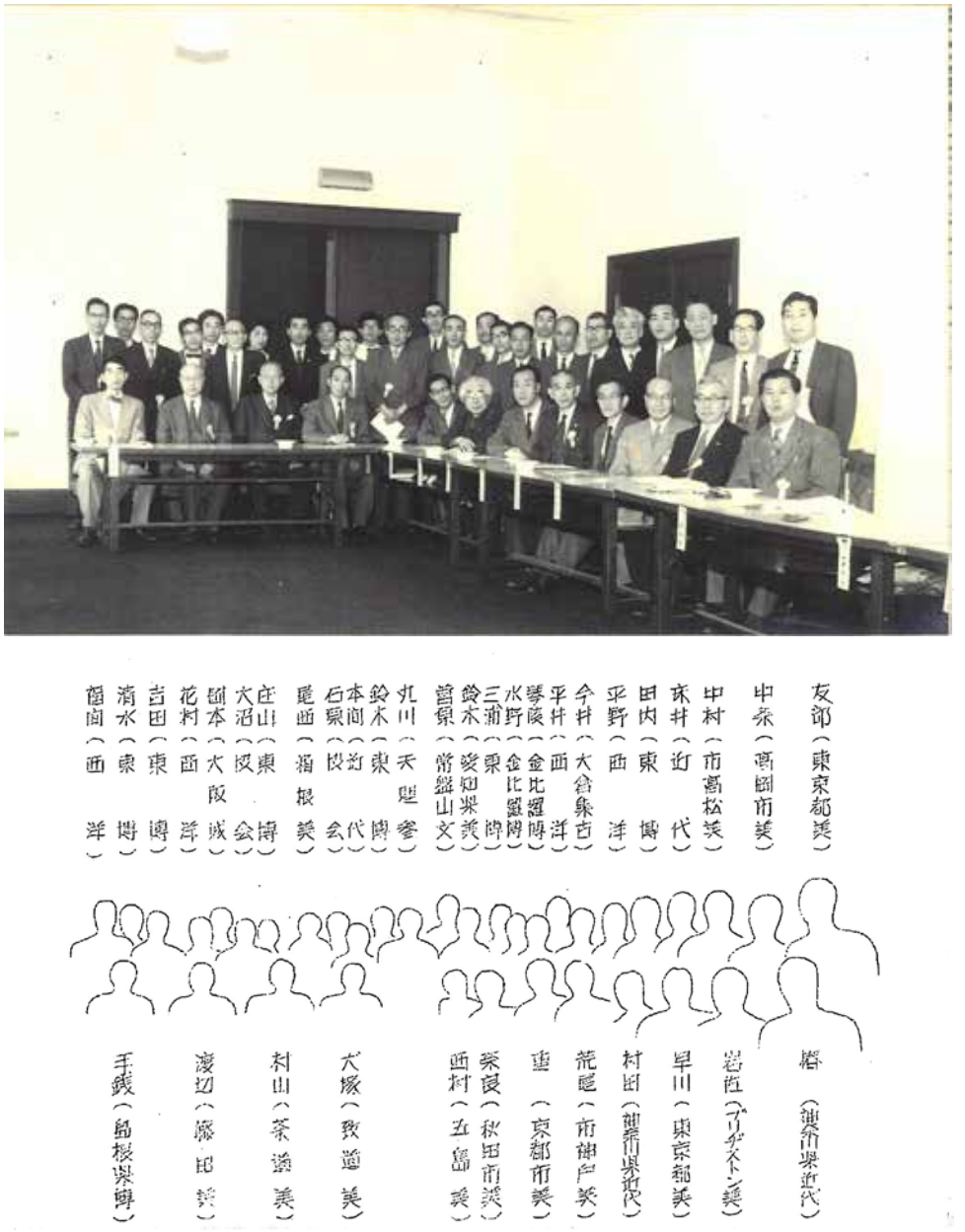
カタログでは表せない作品展示の順番や、空間的関係性など展示の詳細を具体的に記録し、後世に残すという意味がある。今後多くの美術館でこの方法が広がるのではないかと期待している。
森美術館特別顧問 南條史生氏

3DVR はオンラインで遠隔地から鑑賞できるという一時的な利用だけでなく、未来に向けて、展示空間のアーカイブを残すことにも貢献するだろう。
建築史家 五十嵐太郎氏

【ARTLOGUE VR 制作実績例】
- ○ 森美術館「未来と芸術展」
- ○ 東京国立近代美術館「ピーター・ドイグ展」
- ○ 弘前れんが倉庫美術館「Thank You Memory — 醸造から創造へ —」
- ○ アーティゾン美術館「STEPS AHEAD: Recent Acquisitions 新収蔵作品展示」
- ○ 十和田市現代美術館の美術館内の常設作品
- ○ 東アジア文化都市北九州「北九州未来創造芸術祭 ART for SDGs」その他多数

アートローグは
IT 導入支援事業者です。
まずはお気軽に
お問い合わせください。

お問合せ：株式会社アートローグ　電話：06-6467-8656　メール：info@artlogue.org



思い出の一枚
第 9 回総会集合写真（昭和 35 年・東京国立博物館）